



発行：高等学校韓国語教師研修会世話人会

163-0726 東京都新宿区西新宿 2-7-1 新宿第一生命ビル26F 国際文化フォーラム内
tel. 813-5322-5211 fax. 813-5322-5215 e-mail. forum@tjf.or.jp

世話人会からの報告

昨年8月末に開かれた高等学校韓国語教師研修会で、第2回以後の研修会を運営するための世話人5名を選ぶことが決まり、うち2名が会期中に決まりました。その後さらに3名が決まり、昨年12月6日に世話人全員が東京に集まって第1回の世話人会を開きました。会には第1回研修会の主催者である駐日大韓民国大使館・韓国文化院と後援団体である財団法人国際文化フォーラムのスタッフも加わりました。世話人は任喜久子(大阪府立阪南高等学校)、西澤俊幸(長野県立松本蟻ヶ崎高等学校)、馬場純二(熊本県立菊池農業高等学校)、方政雄(兵庫県立湊川高等学校)、山下誠(神奈川県立岸根高等学校)の5名です。

世話人会で第2回研修会の大枠を検討するとともに、研修会の名称や韓国朝鮮語教育をめぐる現状について意見交換する中で、研修会を一つの場とする今後の教師間ネットワーク作りのために「世話人会だより」を発行することにしました。創刊号には世話人の自己紹介やそれぞれの授業取り組み、韓国朝鮮語教育への思いを寄稿することにしました。全員の原稿を本紙に掲載しています。3月28日には第2回の世話人会を開き、8月の研修会の詳細と創刊号の内容について協議しました。

今後の研修会に向けて

韓国文化院と国際文化フォーラムからの資金的ならびに事務局支援を得て開催する第2回研修会の名称を、昨年に引き続き高等学校韓国語教師研修会とします。

将来的には、教員研修事業などを運営する組織として高等学校韓国朝鮮語教育研究会(仮称)の発足を検討したいと考えています。韓国朝鮮語とするのは、第1回第2回の研修会と同じく、日本の高等学校で韓国語の外にハングル、朝鮮語などと呼ばれる教育の取り組みすべてが対象であることをより明白にするためです。

一人ひとりが寄せる 물결

本紙は高等学校の韓国朝鮮語教育に関わる教師たちみなさんのものです。私たち一人ひとりの活動が静かな波紋となって、しだいに広がっていくことを願い、물결と名づけました。浜辺に打ち寄せる波や湖面に広がる波紋のように、韓国朝鮮語教師が作り出す波 물결を着実に伝えていきたいと思っています。

各学校の取り組みや授業風景、近況、エッセイなど、みなさんの原稿を基に年2回のペースで発行したいと考えています。形式は自由ですが、文字数は1原稿につき1,000字程度とします。文字数が大幅に超えた場合、割愛させていただくことがありますので、ご了承ください。記述は日本文・ハングルいずれでも結構です。原稿の採用に際して最小限の編集上の変更を加えさせていただく外は、基本的に原文どおり掲載いたします。原稿料は無料とさせていただきます。

送付先は国際文化フォーラムとします。できれば、電子メールで forum@tjf.or.jp 宛に原稿をお送りいただければ幸いです。郵送・ファックスの場合も含め、물결の原稿であることを明記してください。

なんで朝鮮語やらないの？

長野県立
松本蟻ヶ崎
高等学校
西澤俊幸



「なんで朝鮮語やるの？」——学生時代に朝鮮語を専攻していた頃、このような問いかけを受けることがしばしばありました。朝鮮語の授業を開講した今も、時折「なぜ朝鮮語を専攻していたのですか？」と尋ねられることがあります。今思い返してみても、高校3年の進路決定の時に、一体自分が何を考えて大学で朝鮮語を専攻することを思い立ったのか、よくわかりません。今でこそ、その問いかけに対する自分なりの答えは持っているつもりですが、その当時は「ただ何となく」というのが正直な答えではなかったかと思えます。

しかしながら、「なんで朝鮮語やるの？」と聞く人はいなくても、「なんで英語やるの？」と聞く人がいないのは何故なんだろう、という疑問はその後心の中に流れていました。それが、今の学校で「ハングル基礎」の授業を開講するエネルギーにつながって来たのだと思います。

松本蟻ヶ崎高校で「ハングル基礎」の授業を開講して3年が過ぎました。教材選びから日々の授業展開まで、手探りの中で進めてきました。3年生の2単位の選択科目という開講形態の中で、何をどのように扱っていけばよいのか、試行錯誤の中で進めているのが現状です。このような状況の中で、今年の夏、高校で韓国朝鮮語教育に携わる教師たちが会したこと自体が、私にとって意義深いことでした。教科書・教材開発、韓国朝鮮語教育の普及、さまざまな開講形態に応じたガイドライン作り等々、やらなければならない課題の多さを考えると気が遠くなるほどですが、このような組織が産声をあげたことは、まず第一歩を踏み出したことになるわけです。地に足をつけて、できることから一つ一つやっていくほかないのだと考えています。

今年をはじめ、授業を選択していた生徒の中から大学で韓国朝鮮語を専攻したいという生徒も出てきました。

韓国朝鮮語に触れた生徒の中に、テレビなどでそれまでは見過ごしていたハングル文字に目がいくようになる、聞き流していた韓国朝鮮語に耳をそばだてるようになる、といった変化が確実に見られます。高校在学中にはたとえ芽が出ないとしても、いい種を蒔くことはできているような気がしています。

4月からは今年と同じほぼ30名の生徒の参加を得て、4年目の授業がスタートできそうです。

「なんで朝鮮語やらないの？」——そう生徒に呼びかけていきたいです。

志ある人たちとともに

大阪府立
阪南高等学校
任喜久子



안녕하세요? 阪南高校で韓国・朝鮮語が選択必修科目として開講し、教え始めてはや6年が過ぎようとしています。その前の非常勤講師の期間も含めた西成高校での10年間を入れると、何と16年も朝鮮語教育に携わっていたことになり、自分でも信じられないくらいです。

多くの在日二世の方々と同じく、私も思春期の頃は自分のアイデンティティーの模索に苦しみ、結局は外大(大阪外国語大学)の朝鮮語学科に進むという遠回りをしていたのですが、まさかこんなふうに朝鮮語教育に携わるとは夢にも思っていませんでした。

新卒で、たまたま夜間中学や民族学級、高校の朝鮮語授業などを経験することになり、今思い起こせば本当に貴重な体験でした。小学校の民族学級では慣れないオルガンを弾き、粘土で 거북선(亀甲船)を作ったり、夜間中学では畏れ多くも一世의 할머니(ハルモニ)と民謡を歌い、高校では朝文研の生徒と 장고(チャンゴ)を叩き、見よう見まねで 치마 저고리(チマ・チョゴリ)を作って、부채춤(扇舞)を踊ったりと、自分の学生時代には考えられないような民族との豊かな出会いがあり、

本当に刺激的な毎日でした。この時期あまりにも多忙で、実を言うと失ったものもあるのですが、得たものは数限りありません。

でも、朝鮮語授業そのものはどうだったでしょうか……日本の中の朝鮮語教育を取り巻く状況やら、学校・生徒の実態等を差し引いても振り返ると恥ずかしくもあり、情けなくもあります。そんなことを考えていた矢先に昨年の研修会がもたれ、私にとって非常に有意義かつ刺激的な出会いの場となり、また自己を振り返る機会にもなりました。

日本での朝鮮語教育には「語学教育」、「人権教育」「国際理解教育」「共生教育」、また在日の子どもたちが在籍するところでは「民族教育」という三つの側面があると思います。遅々とした歩み、少ない人数であっても、志ある人たちとともに前進できればと願っています。

함께 하자 ハムケハジャ

兵庫県立
湊川高等学校
方政雄



湊川高校は、全国に先駆けて韓国朝鮮語が必修の正課として開講されて25年を迎えています。今でこそ全国約150校の高校で授業が営まれ、少しは外国語としての市民権を得ようとしています。隣国の言葉が日本の公教育の中に入る余地すらなかった当時、言葉を学ぶことを通して隣国を（「在日」も含め）歪みなく正しく理解し、友好を深めようという目標を掲げて設置されたのです。そこに至るまでの努力と英断と先見性が、四半世紀を経て今ようやく実りを結びつつあると私は感じています。

私は在日コリアンの二世です。私が学校に通っていた頃は、今以上に在日に対する偏見や差別がありました。私も例外なく「何でチョーセン人に生まれたんだろう」と自分の出自を恨み、通名を名乗って日本人の面をかぶり、「チョーセン」がバレることに怯え、悶々とした胸の

内を誰にも明かすことなく、貝のように身を閉ざして学生時代を過ごしました。

転機は高校2年のとき訪れました。クラス担任が私に、「自分を隠さず本名を名乗り、誇りを持って生きろ」と言い放ったのです。冷や汗が吹き出て、当然のように私は猛反発をします。「何の権利があって、そんなひどい仕打ちをするのか」。しかし、それこそが偽りのない生き方であることを、私は知らないわけではありませんでした。だが、怖くてそれができないのだ。それから心の中で葛藤が始まり、悩みの末に堰を切ったようにクラスの前に自分の出自と本名を名乗ることになるのですが、そこに至るまでにはさらに幾つかのできごとと歳月が必要でした。忌避し続けていた自分の民族を自覚し、向かったとき、失われていた魂を取り戻す営みとして、私は母国語をむさぼるように学び始めていました。私の韓国朝鮮語は、精神的な「元手」が多くかかっています。私だけでなく、「在日」ならば大なり小なり同じような思いを持っているのではないかと考えています。

昨年の夏、東京での研修会するとき、同じ思いを持ち、日夜奮闘しておられる先生方が一堂に会したことにより感激し、勇気を得たのは私だけではなかったろうと思います。「日本」「ネイティブ」「在日」と、先生方も各地から来られていて、授業の目的や形態、内容等もバラエティに富み、十数年来同じ教材で新鮮味のない授業をしていた私にとってはよい刺激になり、発想の転換を迫られる研修会でもありました。出会い、情報を交換し、悩みを語りあい、この語学教育を深めよう、そのような交流の大切さを改めて感じました。

隣の国の言葉が当たり前の外国語として使われること——私の教師としての課題でもあると思っています。

함께 합시다 ハムケハブシダ。

第1回教師研修会での教師間の討議内容の一部を『国際文化フォーラム通信』第42号（98年12月発行）に掲載しています。5月発行予定の韓国朝鮮語教育に関するレポートにも、参加者の各校での取り組みなどが掲載される予定とのことです。

イムニダ先生

熊本県立
菊池農業
高等学校
馬場純二



「アンニョンハセヨ イムニダ先生！」窓越しに、くりくり目玉が笑います。イムニダ先生(임니다 선생님)、何とも変なアダ名をもらったものだなと思ひながら、その響きに親しんで違和感を感じなくなりつつある私があります。

本校に「韓国語会話」が導入されたのは97年の4月。教材その他、準備も調わないまま見切り発車でした。韓国全土の農業高校と交流を始めて10年、生徒や親たちのフラストレーションが溜まり始めていたのです。韓国の学生を自宅に受け入れ、寝食を共にし、身振り手振りで心が通じ合うようになったかと思うと別れ、互いに涙をボロボロ流し、抱き合つて最後の握手。でも、手のひらの温もりが残るだけに切ないのです。夜、韓国の学生たちのフェリーから電話があると飛びついて喋ろうとするのですが、言葉がスルリと抜け落ちてしまいます。名を呼び合い、「また来いよ。行くよ。ありがと」精一杯思いつく簡単な日本語を伝え、電話は切れます。そして改めて、もうあいつはここにはいないんだ、と実感するのです。「せめてカタコトでも韓国語を喋れたら」「せめてハングルだけでも読むことができれば」——積もり積もった思いが学校に届けられ、1年生全員に1単位の「韓国語会話」が導入されることになりました。

しかし、1年生全員対象となると容易ではありません。韓国に全く興味を示さない子、興味はあるけどハングルになじめなくてという子、さまざまです。だから、我々はcultivateの時間だと思つているのです。「土を耕そう、種を播こう。太陽が射してきたらいつか芽吹くよ。種を播こう」——何と陽気な！ご機嫌な！と思われるかもしれませんが、韓国の人たちの暮らしぶりやエピソードを紹介しながら(本当はこちらがメインなのですが)、少しでも韓国を、韓国の人びとを身近に感じてもらえるならよいと思つているのです。授業も、子どもたちが使えそうなフレー

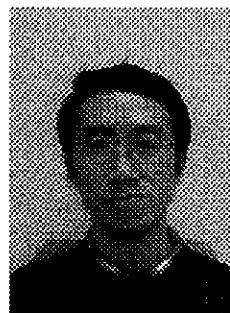
ズ、興味を示したフレーズを口で覚えさせる。「イムニダ先生」もその典型です。韓国の学生と会つて遊ぶことを大前提にしているのです。

昨秋、韓国から学生を5名招待しました。その時通訳を買って出してくれたのが、「私、韓国語は興味ないですから」と、一昨年ほとんど授業に参加しようとしなかった子です。5日間、辞書と会話集を片手に、つきっきりで遊んでくれました。1年の冬の韓国旅行を契機に、「もう一度向こうの子と話したい」と、勉強を始めたそうです。今では本校一の韓国通です。

種を播きましょう。どんな子にどんな可能性や出会いがあるか分からないのです。「とにかく芽吹くさ」——肩の力を抜いて、今日も子どもたちと楽しみましょう。

Korea, the Treasure Island

神奈川県立
岸根高等学校
山下誠



ひよんなことからお隣の国にかかわるようになって、つくづく思うことがあります。韓国は「驚くほど未知なので驚くほど」であり、「見て触れて聞く韓国の、もっと中の部分を知りたい。メタな韓国に突入したい。その希いは、表面的な交流が繁くなればなるほど、いやましに募」ってくるということです。私をいざなっているのは「メタな韓国」なのでしょうか、それとも……魅惑の世界へのさらなる扉を前にして私は、大好きな父母からもらった贈り物をあける幼子のように、うきうきしてしまうのです。(「」内、小倉紀蔵著『韓国は一個の哲学である』からの引用)

今を遡ること9年前の春のことです。ある朝目覚めると、私は「韓国語をやることになって」いました。それは、あたかもずっと前からそう決まっていた宿命のようでもあり、また、夜のあいだに神と交わされた契りのようでもありました。自分が、その決定をなんのためらいもなく

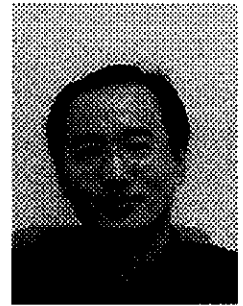
受け入れていたのは、今思い返してもとてもふしぎなことなのですが、私と韓国語との出会いは、ざっとこんなふうでした。

始まって半月を過ぎてしまっていたラジオ講座には、結局ついていけませんでした。その後も、何度となく挫折しかけました。しかし、そのたびに「こんな面白い言語、こんなに素晴らしいことばを、どうして今まで知らずに年をとってしまったのだろうか」という「無念さ」が、私をひきとめるのでした。選択地理で韓国語講座を始めたのも、「私のように隣の国をまったく知らないで」高校を「出て行く学生の数を一人でも減らし……私の味わった無念さを、これからの若い人々には経験させたくないと考えてのこと」でした。神の見えざる手に導かれるように、私は自らの非力を省みることも忘れて、ひたすら歩みを重ねてきました。(「」内、渡辺吉銘+鈴木孝夫著『朝鮮語のすすめ』からの引用)

これまたつくづく思うのが、人との出会いほど力を授けてくれるものはないということです。自分で選択したとはいうものの、やはりどこことなく腰のひけていた生徒たちが、「久しぶりに興味をもてる授業だ」「ニュースにハングルがでてくると、思わずよんでしまう」と、身を乗り出してはしゃいでいます。「韓国人のことをなんとなくさけていたけど、思っていたのと全然ちがってびっくりした」「横浜でチマチョゴリを着てる子が 안녕하세요 って言ってるのをきいてびっくりした。ハングルなんかやってなかったら、きづかずにとおろすぎていたと思う」と、新しい出会いに戸惑いながらも、心躍らせている生徒までいます。「もうきめたことだから……でもなんか……まあ、だめならやめりゃいいさ」と、実のところ、いざ出陣という段になって、ちょっと気弱になっていた私に、可能性を信頼する勇気を与えてくれたのは彼らでした。いつしか、あの「無念さ」は喜びに変わっていきました。未知のものを発見するという、そしてそのたびに新しくなっていく自分自身を見いだすという喜びに。

こんな刺激的な道行きを、再び生徒とともにすることになりました。99年度自由選択の韓国語講座には7名(!)もの生徒が集まり、いよいよ4月には開講です。今の学校にきて3年目、なかなかいいペースです。さあ、それでは、韓国という Treasure Island に出発です!

나의 주제는 감동이다



한국문화원
김금평

좀 거창하지만 내게 있어 “일본”은 일생의 과제로 삼을 만한 것을 찾던중 일떨결에 포착된 표적(標的)이었다. 정신대(挺身隊) 할머니들이 포함된 스무명 남짓의 쓸쓸한 대모행렬이 나에게 작은 영감을 가져다 준 것이다.(92년 6월)

일본과 인연을 맺게 된 이래, 업무적으로 일본과 관련된 일을 하게 된 것은 물론 일본은 내게 있어 땀해야 땀수 없는 생활의 한 부분이 되고 말았다.

취미 정도로 “일본을 알아봐야 겠다” 하면서 일본어 공부 시작되었고, 일본이 정말 흥미있는 세상이라는 것을 느끼게 되면서 한국과 일본 사이에는 일감이 왜 이렇게 많은지를 늘 생각해 왔다.

한일민족은 경제적으로나 문화적으로나 상호 보완재임은 틀림 없다고 생각한다.

따라서, 내가 해야 할 일들은 일본 사람들에게 한국으로부터의 멧세지를 전하는 일과 한국 사람들에게 일본을 제대로 알리는 일을 같은 비율로 수행하지 않으면 안될 것 같다.

한일간에 있어 나의 주제는 “감동”이다. 한국인이 일본어를 하는 것만으로 일본인을 감동시킬 수는 없지만, 일본인의 짧은 한국어 몇마디는 충분히 한국인을 감동시킬 수 있다.

일본 근무를 시작하면서 첫 번째 숙제였던 한국어 교사 연수회가 국제문화포럼의 도움으로 정착하게 되어 더없이 기쁘다.

다만, “한국어” 교사 연수회의 명칭을 놓고 본국과 상의해 본 결과, 대안으로서 “한국어(조선어)” 교사 연수회 정도가 가능할 것 같은 바 선생님 여러분들의 양해를 구하고자 한다.

한국어를 가르치는 일본인 선생님들과 한국어를 배우는 일본인 학생들, 한국에서는 쉽게 인상이 떠

오르지 않을 것이다. 나는 이런 사실들을 가급적 널리 한국에 알리고 싶다.

21세기 일본에서 가장 필요한 상품은 “희망”이라고들 한다. 그런 돈 될 것 같은 상품의 개발은 한국과 일본이 공동으로 했으면 한다.

変化したもの、していないもの

国際文化
フォーラム
小栗章



日本海に対して、동해(トンヘエ、東海)という呼び名があることを知ったときの感動——それが隣国のことばに興味を抱いたきっかけの一つではなかったろうか。1960年代の末、10代の終わりだったと思う。あれから30年が経った。その間に、日本人の隣国観はずいぶん変化したように思う。まったく違った部分もあるかもしれないが、基層部分で変わっていないものがあるように思う。

87年度以後、韓国朝鮮語を導入する高等学校が全国的に広がるようになった。まだまだ少数ではあるが、70年代には考えられなかったことだ。それがいま、あまり違和感を伴わないで日本の学校に受け入れられているように見える。たしかに、何かが変わっている。変化した部分とあまり変化していない部分——二つのものを注意深く見つづけることで、何かが見えてくるように思う。このような作業を続ける中で、私たちの仕事は韓国朝鮮語を学習する生徒といっしょに自分たちの耳を澄ますことである。ことばの学習が、そのためのもっとも有効な手段の一つだと信じてきたし、いまもそう信じている。

高校生の時期に韓国朝鮮語に接する、あるいは修学旅行で韓国に行く、そこにさまざまな出会いがある。30年前の学校教育では考えられなかったことが、少しずつできるようになった。その中で私たちにも新たな出会いがある。よく耳を澄ますと、地平線の向こうとこちら側から人びとの声が聞こえる。

第2回高等学校韓国語教師研修会の予定

期日：8月17日(火)–19日(木) 2泊3日

会場・宿泊：YMCAアジア青少年センター(韓国YMCA)

東京都千代田区猿樂町2-5-5

日程(案)：

8月17日<基調講演および世話人会の報告と提案>

13:00–14:00 参加登録

14:00–14:10 開会、祝辞

14:10–16:00 基調講演

鈴木孝夫(慶應義塾大学名誉教授)

16:30–17:30 世話人会の報告と提案

18:00–20:00 懇親会

8月18日<授業実践報告と実践交流>

9:00–9:50 西澤俊幸(松本蟻ヶ崎高校教員)

9:50–10:40 方政雄(湊川高校教員)

11:00–12:00 討議

13:00–13:50 任喜久子(阪南高校教員)

13:50–14:40 趙源逸(楊志館高校元教員)

15:00–16:00 討議

16:30–18:30 授業実践交流

19:00–20:30 地域別懇親会

8月19日<提案と地域別討議を受けた意見交換>

9:00–12:00 研修会の今後の方向性

12:00–13:00 地域別連絡会

13:00–14:00 まとめ、閉会

研修対象：日本の高等学校で韓国朝鮮語教育に携わる教員および学校関係者約50名(近い将来導入を計画している学校の関係者も参加できます)

参加者の決定：6月15日までに所定の要領で参加申込みした方を対象に、地域バランスなどを考慮して調整し、6月30日までに通知します。

参加費：初めての参加者 無料

第1回研修会の参加者 10,000円

いずれも往復の主要区間交通費、研修会会場内の宿泊費および食費は主催者が負担します。

主催：駐日大韓民国大使館・韓国文化院

国際文化フォーラム

後援：YMCAアジア青少年センター

問合わせ先：国際文化フォーラム tel. 03-5322-5211